

南アフリカ共和国帰国報告

高橋 一郎

(16-1, 南アフリカ共和国, 理数科教師, 埼玉県立川越女子高等学校)

1 南アフリカ共和国について

私が派遣された南アフリカ共和国はアフリカ大陸の最南端にある国である。国全体の経済状態はよく、サブサハラ諸国全体の GDP の約 4 割を捻出する。派遣された当時 (2004 年) は人種隔離政策 (アパルトヘイト) からの開放 10 周年を迎える時期であり J O C V の同国派遣開始から 2 年を迎えようとする時期であった。

南アフリカには J O C V の派遣前から日本人による理数科教師再教育プロジェクトである M S S I プロジェクトが進んでいた。J O C V の活動は現地スタッフである C I (日本の教育指導主事に近い存在) と協力してワークショップ等による現地理数科教師の再教育と M S S I プロジェクトのサポートをその中心業務として期待されていた。

2 活動初期

現地語学訓練を経て、任地に派遣されたのは 2004 年 8 月であった。この時期は南アフリカの教育スケジュールでは 3 学期に当たる。10 月からは最終試験が始まるため、本格的な活動を行うことは難しい。そこで、C I の活動に随行し、現地の教育事情を把握することからはじめた。

南アフリカ共和国には公用語が 11 言語 (英語、アフリカーンス、ズールー、コーサ、スワジ、ンデベレ、ソト、ツォンガ、ツワナ、ベンダ、レボワ) あるが、派遣以前には C I の業務は完全に英語で行われるという情報を得ていた。しかし、任地であるマレラネ Sub-Region が南アフリカでは珍しい単一言語地域であったことと、同僚の C I が地元の出身者であったことから C I は訪問先の学校ではスワジを使うことが多かった。また、現地教員は教室に部外者が訪問することを好まないため、学校に訪問するのはいいが、授業や生徒の実際を観察することはとても難しかった。

そうこうするうちに 3 学期が終わり、最終試験の時期を迎えた。4 学期のこの時期、C I の業務は各学校にテストを配ることに終始する。朝、地域の教育事務所に向かい、テストを受けとり、決められた学校に配達して 3 時間後に回答されたテストを回収して事務所に送り届ける。それだけである。

試験の間の時間に配属先に戻ろうにも片道 1 時間程度かかってしまうため戻ることができず、学校周辺でやることもなく時間をつぶす。完全に暇をもてあました状態である。要請に従って C I と協力しようとするとうとうこのような現状にぶち当たってしま

う。それでも何かできることを探ろうとしてはみたが、見つけることはできなかった。

C I たちは彼らの業務を精一杯こなしているが、彼らは実際に学校に通っている唯一の行政職員であるため、教育事務所から雑務を大量に言いつけられるため、本来の業務である教員の能力向上に対してまとめて取れる時間がないように感じられた。ここで彼らと同じ仕事を続けていては自分のためにも、彼らのためにも、現地の教員のためにもならないと感じた。そこで、C I と離れて活動する道を探すことにした。

3 M S S I プロジェクト

前述のとおり、南アフリカ共和国ではM S S I プロジェクトという日本主導のプロジェクトが走っていた。このプロジェクトは（日本の）大学教授によって作られた実験を含んだコンテンツをカスケード的にムプマランガ州全体に広めていこうというものである。私が赴任する前にG E T（日本の中学校にあたる）で実施され、一定の成果を得ていた方式である。しかし、開始から5年が経過し、現地の教員やC I 達に慣れが生じているうえ、C I の大幅なメンバーチェンジがあったこともあり、うまく回っていない状態になっていた。具体的にはカスケードの上位にあるC I たちがコンテンツを十分に消化できていないことがひとつ。実際の教育現場では調達することができない機材を使うことになっているケースが多いことが二点目。そして、C L ワークショップ以降の実施率が低いことが挙げられる。M S S I が作り出したクラスターというものは非常に魅力を感じるがM S S I 全体に対してはそのスケジュールの過密さもあり、可能性を感じることができなかった。1回目のM S S I ワークショップは参加して現状の理解に努めたため、難しさばかりが目立ってしまった。M S S I はプロジェクトとして最終段階にあったため、これまでの成果をまとめることと現地に引継ぎを行うことに主眼が移っていた。2度目のM S S I ではC L ワークショップで自分のセッションをもらい、クラスターリーダーの前で実験の紹介を行った。これによってクラスターリーダーにある程度認めてもらうことはできたが、その後のクラスターワークショップに参加したくとも参加するための交通手段を確保することができなかった。半径が50km程ある私の任地をカバーしようと思ったときに交通手段が確保できないことは常に大きな障害として私の前に立ちふさがった。

4 交通手段

南アフリカ共和国は犯罪の多い国である。その犯罪率の高さから南アフリカに派遣された協力隊員は夕方の5時を過ぎて屋外を一人歩きすることはない。また、現地の人々の日常的な足であるコンビタクシー（乗り合いバス）も使用を控えるように伝えられていた。そのような中、点在する40校弱の担当校をカバーすることは困難を極めた。当初はC I と行動し、彼らの業務を補佐することが要請とされていたため、移動には彼らの車に同乗することとされていた。しかし、前述のように現職教員の資質の向上を考えたとき、われわれにできる最良のことは彼らがやりたくてもできない業務を行うことであ

る。必然的に行動は分かれることになる。そうすると学校に訪問する手段を失う。そこで違った形での移動手段の確保を模索した。そのひとつが次にあげる S I L P M S という活動である。

5 S I L P M S

同じ地区 (Ehlanzeni) に派遣された数学隊員の柳田幸紀隊員 (16-2) と協力して開始した活動である。現場の学校にはわれわれのような授業改善の取り掛かりを与える存在が必要とされているにもかかわらず、そこまでたどりつくことができないという 2 名共通の悩みに光明を見出すための活動である。柳田隊員は地域事務所 (Regional Office) 内に住居を構えていたため、地域教育事務所の上層部と話をする機会が多かった。その中から、我々に移動手段を提供しつつ、他教科にもてこ入れを図るこのプランが立案された。なお、このプラン実現のきっかけとしては M S S I 教授陣の尽力も大きかった。

具体的には、地域内の成績不良校から 2 校を選び出し、週一回 2 時間の授業を 4 週間にわたって続けるというものである。指定教科は数学、物理化学、農学、生物である。その中で、私は物理化学の実験を含めた授業を担当した。Ehlanzeni 地区の C I を 1 名、S I L P M S 専属とすることで我々の交通手段を確保してくれた。その C I の不在は他の C I が担当地区を分け合うことでカバーされた。

計画の立案から実施までは困難を極めたが、最終的に 2 校のうちの一方で大幅な試験合格率の向上を招くことができた。しかし、残念ながらもう一方では合格率が低下することとなった。繰り返し、同じ教員と接することで彼らの授業に対する態度にわずかな変化を感じられたが、やはりこの活動においても C I の不規則な行動により突然の予定の変更を強いられることが多かった。また、きわめて狭い範囲に影響力がとどまってしまい、自分の担当範囲全体に対する活動にはなりえなかった。地域事務所の次年度の予定が不透明なこともあり、C I に頼らずできる活動を模索するようになった。

6 自立

このように、どのような活動をしていても最終的に交通手段を確保することができず、活動の方向性を断念せざるを得ないことが繰り返された。そこで、何よりも交通手段を確保することを考えた。この時点で活動開始から 1 年が過ぎ、現地の事情を把握できるようになっていた。幸いにして私は担当地区の中心的な場所に住居を構えていた。住居からコンビタクシーが各方面に向かって走っている。ここまでの活動を通してコンビタクシーに乗ることそれ自体の危険性が低いことはわかっていたが、どのようにして各学校にコンビタクシーを乗り継いでいくのか、降車した後の安全性や行き方をどうするのかはわからなかった。しかし、ここまでの活動で任地での認知度もだいぶ増していたので電話によってアポイントを取り付け、降車後の道案内をしてもらった。結果的には担当とするほぼすべての学校に 2 時間程度あれば通うことができた。

ここまでの活動で現地の教員が最も困っていることが実験であることはわかっていたので先輩隊員が残した実験書に修正を加えた 10 種類の実験マニュアルを作成していた。その 10 種類の実験をすべての学校で実施することができるようにすることがそれ以降の活動の目標となった。具体的には

- (1) 各学校の実験室を調査し、10 種の実験に必要な機材・薬剤の有無をチェックする。
- (2) それらの機材・薬剤を使用し、現地の道具のみで実験紹介のワークショップを行う。
- (3) 機材・薬剤には不均衡があるので交換をすることで少しずつでもすべての機材・薬剤がそろそろように働きかける。1 校ですべてをそろえることはできなくても、近隣の学校で 1 セットがそろそろようにする。
- (4) 薬品は一校で使用していると使い切る前に劣化して使えなくなることが多いので周辺校で共同購入する仕組みを作り小分けにする。

である。10 月から 12 月の採集試験の最中に (1) は実施することができた。(2) は 1 月から 3 月にかけて担当する 3 つのクラスターでワークショップを行うことで 6 割程度は紹介することができたし、残りの実験についてもマニュアルを配布することができた。しかし、(3) と (4) に関してはアイディアの紹介とほんの一握りの実施例を残しただけで実施することができなかった。この (1) ~ (4) をすべて実施することができたならば、JOCV にとっても現地教員にとっても状況は質的に大きな変化を遂げたと思う。返す返すも時間が足りなかったことが残念である。

7 得たもの、遺せたもの

南アフリカにおける活動は困難を極めた。多くの時間を自分との問答に費やしたような感触を受ける。しかし、その結果として南ア JOCV 全体の懸念であった交通手段の確保に向けて大きな前進をしたこと、現地の教員にあきらめず行動し続けること、ものがなければ自分で作る精神を示すことができたことは胸をはれる結果だったと思う。そのような一定の満足を得ることができたことは支え続けてくれたカウンターパート、刺激を与えて続けてくれた同地区の JOCV 達、常に歓迎してくれた現地の教員たちのおかげだと思う。人の出会いという大きな運に恵まれ 2 年間の活動を全うすることができたことは大きな喜びである。

また、彼らと出会い、自己問答を繰り返しながら一緒に困難を乗り越えることで言葉にすることは難しいが、自らの内面に質的な変化を感じることができる。この変化はこれからの人生において大きな役割を果たすことだろう。

今後は南アで得た経験を生かし、自らの生活環境を越えて想像力を働かせることができる生徒を育てていきたいと思う。